

私立大学の個性と多様性を表す 周年事業

私学の歴史は明治時代初頭に始まる。その姿は、創設者が目指す人材育成に向けた私塾から始まったもの、私立法律学校とも呼ばれる時代の要請から展開していったもの、わが国の伝統を重んじこれまでの歴史を重視するものなど、創立に込められた想いは現在の私立大学の個性、多様性に通じるものがある。

わが国における大学の歴史が厚みを増してきた昨今、大学や学校法人の創立・開学からの区切りとなる周年記念事業や行事は多くの大学で行われており、一定の目標を掲げて事業等を展開することで、各校の発展の新たな



創立百四十周年・再興六十周年を祝う

河野訓
皇學館大学学長

コロナ禍の下での学部100周年事業

―法政大学文学部における成果と課題―

小倉淳一
法政大学文学部長

Commemorati

契機となっている。また、大学創立・開学を起点とした周年事業の他に、さまざまなタイプの「周年事業・行事」の展開がみられるようになってきている。

特に私立大学においては、前身となる諸学校の創設や建学の精神、創設者にまつわる各種周年事業や、大学昇格、学部やキャンパスの開設など、各大学の歴史の節目をさまざまな形で迎えている。このような展開はまさに、私立大学の個性や多様性を表すものであり、わが国の高等教育の歴史に私立大学の存在が欠かせないことを改めて認識する機会ともなっている。

今回の特集では、個性あふれる周年事業・行事の目的や展開、効果と成果、今後に向けた課題や展望などについて共有する機会としていきたい。

二十歳を迎えた博物館
諸事万端に耕雲種月

山下 純平
駒澤大学禅文化歴史博物館係長

中興の祖、山岡順太郎のこと

芝井 敬司
関西大学理事長

地域との協働による周年の取り組み

—池袋キャンパス100周年記念事業—

佐々木 静
立教大学総長室企画課長補佐、
兼立教学院企画室長補佐

「ガクモンノススメ」プロジェクト

山崎 敬夫
慶應義塾広報室長



創立百四十周年・ 再興六十周年を祝う

河野 訓

皇學館大学学長

はじめに

明治十五年（一八八二）に伊勢神宮・内宮の林崎文庫に皇學館が設置されて百四十年を閲けみした。かつて廃学という苦難を味わった時期があるものの、令和四年は皇學館大学として再興が叶って六十年の佳節に当たり、皇學館大学は記念式典や記念出版、記念展示等の記念事業を行った。

皇學館大学は伊勢神宮の祭主であった久邇宮朝彦親王しんのうの令達によって神宮の林崎文庫に開設された「皇學館」を直接の起源としている。本学はわが国の歴史と伝統に基づいた学問研究を志し、日本の文化、日本のこころを明らかにすることを目指してきた。明治三十三年には本学の建学の精神が最も簡潔・明瞭に表明されている

賀陽宮邦憲王令旨かやのみやくにのりおうりようじが発せられた。この令旨は今日まで大切に継承され、本学で行われる入学式や卒業式などの式典において奉読されている。今回の記念式典においても、学長が謹んで奉読した。

本学はその後、昭和十五年に官立の神宮皇學館大學となったが、昭和二十年の敗戦の後、神道指令をうけて廃学を余儀なくされた。一旦、廃学となったものの、神宮皇學館後援会（会長・吉田茂、副会長・池田勇人）関係各位や全国の有志、神宮皇學館卒業生などの支援をうけ、昭和三十七年（一九六二）四月に再興されるに至った。爾来じらい、激動の時代変革の中で歴史を重ね、地域の方々と神社界の皆様方の温かいご理解・ご支援のもと、昨年、令和四年には創立百四十年、再興六十周年の区切りの年を迎えることができた。

現在、皇學館大学は文学部・教育学部・現代日本社会学部こくごの三学部と大学院、専攻科によって構成されている。学部一学年の定員は六二〇名（令和五年度は六五五名入学）である。教員志望者が多く、毎年百名以上は教職に就いている。本学の特色の一つは全国の神社で奉仕をする神職を養成していることである。神職を養成する大学は東京の國學院大學と本学の二校のみであり、全国から

学生が集まってきている。

大学は風光明媚な伊勢志摩国立公園に接し、自然豊かなところにあり、春夏秋冬、季節の移り変わりを五感で感じることができるキャンパスである。(キャンパス写真等については『大学時報』第四〇八号、二〇二三年一月号の大学点描をご参照ください)

1 皇學館大学創立百四十周年・再興六十周年記念事業の目的や展開

創立百四十周年・再興六十周年を祝う記念事業は学内に設けられた記念事業統括委員会が中心となって計画を練り、実施にむけて周到に準備を推し進めてきた。令和四年四月三十日には本学の創立百周年記念講堂において「創立百四十周年・再興六十周年記念式典」が執り行われた。当日の式典には三笠宮家の彬子女王殿下の台臨^{たいりん}を仰ぎ、社界、教育界や地域の市・町の方々など約二百名が参列した。時節柄、参列者は収容定員の半数以下に抑え、式典に先立って皇學館関係者の物故者慰霊祭も行われた。「写真1」

併せて記念事業として百二十周年以後十年の本学の

事績を明らかにした『皇學館大学百四十周年記念誌 飛躍と発展の十年』(以下、『百四十周年記念誌』という。)が刊行された。さらには記念学術事業として『伊勢神宮・大嘗祭研究文献目録』及び『皇学論纂』の編集・出版を行った。前者は本学が

蓄積してきた皇室研究と伊勢神宮研究の延長にあるもので、正編に続く続編である。後者は本学関係教員の執筆論集であり、内容に制約は設けなかったが、日本の歴史・文学や神道に関する研究が多くなっている。

また、五月より八月末まで本学の佐川記念神道博物館において皇學館大学創立百四十周年・再興六十周年記念展示「伊勢と皇學館の百四十年」を行い、同名の図録も制作・刊行した。図録は展示品の解説を基本としながらも、皇學館の誕生から戦前の発展、廃学と再興の経緯、再興後の発展が写真を豊富に用いてつづられている。

大学行事として大学の「節目」を記念事業等で祝い、大学



【写真1】式典(中央は彬子女王殿下)

に関わりのある者が共有することの意義は大きい。現代社会では、人生や生活の中での「節目」が軽視される傾向があるが、本学はそれを大切にしている。学生は入学式や卒業式にあつては学友と一堂に会し、厳粛な式典を通し、清らかな気持ちで新しい一步を踏み出す。一方、大学にとって周年事業を遂行することは、一旦、立ち止まり、振り返り、先に進む機会をもつことであり、この機会を区切りに生まれ変わり、決意を新たにし、新たな未来を創造することにつながる。本学の記念事業も先人の積み重ねてこられた偉業を尊び、その足跡を確認し、ここまで本学を支え、本学のためにご尽力いただいた皆様に心よりの感謝と御礼を申し上げますとともに、本学のさらなる将来の発展を期して執り行われた。

2 記念事業の効果と成果

一定の社会集団で行われる儀式・儀礼に関しては社会的統合の機能があるといわれる。共同の儀礼への参加によって、メンバー個々人の間に連帯感が強まり、社会的統合の絆が再確認され強化される。大学において周年事業を厳粛に執り行うことは、一つの社会である私立大学の

構成員の連帯を維持・強化する統合の機能が図られるとともに、地域の政財界の方々や高等教育機関の方々、さらに本学の場合、日頃からご支援を賜っている神社関係者の方々をお招きして催行することは地域社会においても、神社界においても本学が不可欠の存在であることを再認識していただく格好の場ともなる。

今回の創立百四十周年・再興六十周年の諸行事は規模を控えめにした。何よりも来る創立百五十周年・再興七十周年を見すえた、一つの大きな「節目」として位置づけることは当初の計画段階から織込み済みのことであった。例えば百五十年誌を編もうとするとき、百三十二、三年目のことを書くこうとしても、資料が散逸し、知る人も少なくなっていて正確には書けないのではないか、という疑問があり、百三十年から百四十年の十年間に関しては『百四十周年記念誌』として現段階で記録を残すことにしたのである。

今回の記念事業の中で創立以来の足跡を見わたす展示会を開催し、記念誌によって大学の歴史を縦覧じゅうらんしたことによって、将来の進む道をよりの確に判断する材料が提供された。日頃、学生の指導と自らの研究に追われている

教員や手に余る業務を抱える職員にとって、自校の歴史と建学の精神、特色などを再確認する機会が十年に一度とはいえ廻ってくることは、私学としての創立の精神を維持・継承し、更に将来、どのような展開が可能であるのかを探し求める一助となるものである。

3 今後に向けた課題や展望

本学にとつての次の周年事業は令和十四年(二〇三二)の創立百五十周年・再興七十周年が想定されている。本学の歴史にとつても大きな通過点となるものであり、今年度中には大よその全体計画を立てたいと考えている。

かつて平成二十四年(二〇一二)には創立百三十・再興五十周年の記念事業が大々的に行われた。記念出版と位置づけて『皇學館大學百三十年史』(総説篇、資料篇一〜三、年表篇・写真篇)や『續日本紀史料』などが刊行されたほか、キャンパスの北地区が一新された。平成二十年に設置されていた教育学部の関連施設の充実を図り、教育研究棟の六号館、七号館、八号館と新研究棟の九号館が竣工した。次の創立百五十周年・再興七十周年を迎えるにあたっては

『皇學館大學百五十年史』などの大学史の整備のほか、設備の更新・充実も念頭に入れて進められようとしている。

今回の創立百四十周年・再興六十周年に向けて所蔵資料の再整理を進める中で、百五十周年に向けてはこれをデータ化し、意味のあるものについては差し支えない限りアーカイブ等により公開し、閲覧に供すべきではないか、という共通認識が生まれた。今回、作成された『百四十周年記念誌』には写真や図表がふんだんに取り入れられているが、将来は近代から現代にかけ、創立・廃学・再興という数奇な運命をたどった皇學館の歴史を実感できる原資料を公開したいところである。『百五十年史』の編纂とその公開の在り方については衆知を結集して取り進めてまいりたいと考えている。

本学再興以来、重要視している言葉に「全学一体」がある。教職員、学生は言うに及ばず、時には保護者、卒業生(館友と呼ばれる)も含め、一体となつて取り組むことが伝統とされてきた。世界に様々な混乱があり、今後も先の読めない時代が続くと予想されるが、今後迎える周年行事については適切な規模を保ちつつ、誠意をもって取り組みたいと考えている。

ve Project

コロナ禍の下での

学部100周年事業

―法政大学文学部における成果と課題―

小倉 淳一

法政大学文学部長

はじめに

1919年に大学令が施行されてから100年以上が経過した。1880年創立の東京法学社を源流とする和仏法律学校法政大学は1920年4月に法政大学として認可を受け、法学部、経済学部を設置し、2年後の1922年4月に法学部を法文学部に改組して文学部と哲学部が設けられた。これを起点として本学文学部の歩みが始まった。その後、法文学部は1947年に法学部と文学部に再編成され、2022年4月に100周年を迎えることとなった。

現在の文学部は哲学科・日本文学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科の6学科によって構成されている。文学部では創設以来100年の教育・研究上の事跡と意義を広く発信するため、2022年10月15日に「法政大学文学部創立百周年記念イベント」を開催し、翌2023年3月20日に記念誌『文学部の百年』を刊行した。本稿では当初は思いもよらなかったコロナ禍の中で計画・実施した文学部100周年事業を紹介し、その成果と課題をまとめておくこととしたい。

1 実行委員会の立ち上げと初期の計画

100周年事業を実施するにあたっては、2019年度より文学部教授会において議論が始まり、事務局を学務部学務事務課文学部担当に置くとともに、大学Webサイト内に予告ページを作成するなどの準備を開始した。

2020年12月には各学科の教員からなる「文学部創立百周年記念事業実行委員会」の設置を決め、藤村耕治日本文学科教授を実行委員長として2021年4月に実施企画の検討に入った。これに先立って本学では2020

年度に法学部・経済学部が100周年を迎えてそれぞれ記念事業を実施しており、学務部を通じて学部を対象とした記念事業の規模等についてある程度の見通しを得ていた。一般に学部を単位とした周年事業の実施は珍しいことと思われるかもしれないが、これら先行事例からも学部内においては周年事業の実施は当然のことと受けとめられていた。また、文学部では創設80周年・90周年に記念事業を実施した経験があり、その際の実務担当者から予算やスケジュール、記念企画の運営等についての経験を継承・共有できたことは幸いであった。

企画を検討するうちに、文学部と関係の深い野上記念法政大学能楽研究所が同じ2022年に創立70周年を迎えることから、同研究所と合同でワークショップ・講演・展示を開催することが提案され、委員会での承認を得た。また、本学は2020年度にHOSEIミュージアムを開設し、同年度中に市ヶ谷地区のキャンパス再整備を完了していたこともあり、新装なったキャンパスを多くの卒業生に見てもらおう機会となるとも考えた。

2021年11月には委員会による記念事業案がほぼまとまり、全体のテーマを「文学部の過去・現在・未来」と

し、2022年10月15日に能楽研究所による企画、シンポジウム、キャンパスツアー等を開催すること、オンライン中継を併用したイベントを配信すること、記念誌を刊行すること等を教授会で決定した。

事業の実施に向けて、2021年9月からは委員を増員して各企画に備えることとなり、6学科から各1名を選出して委員総数は12名となった。

2 コロナ禍の中での企画再検討

しかしながら、2020年から本格化したコロナ禍は出口の見通せない状況が続いたため、予定していた企画の開催については、その可否も含めて再検討を余儀なくされた。また、本来こうした事業は卒業生組織と連携しながら支援や助言を受けつつ進めるべきものでもあるが、コロナ禍の中では卒業生の来校もままならず、企画段階での支援も受けにくい状況が続いていた。結果として委員会では法政大学文学部同窓会との共催を見送らざるを得ず、対面開催についても決定の時期を先送りにして感染症の動向を見守ることになった。

ところが、2022年度になってからもコロナ禍は完全には収まらなかったため、残念なことに6月に至って大学に卒業生や学生を呼び込んでの対面開催を断念せざるを得なくなった。学部としては苦渋の選択を余儀なくされたが、企画内容・プログラムを見直してWebページでの企画を充実させ、イベントをオンライン中継として開催することにした。

最終的にまとまった企画内容は左記の通りである。

1 文学部創立百周年イベント(オンライン中継)

記念式典

第1部

法政大学能楽研究所による講演・ワークショップ

第2部

シンポジウム

「文学部の過去・現在・未来―百年間のたからもの―」

2 文学部6学科の「過去・現在・未来」を動画で巡る

(Webページ企画)

3 新しい市ヶ谷キャンパスのご紹介(Webページ企画)

4 法政大学文学部創立百周年記念募金

5 文学部百周年記念誌

3 創立100周年記念イベントの開催

実行委員会では再編した企画内容をもとに準備を進め、2022年10月15日には、本学スカイホールにおいて、記念式典、能楽研究所による講演とワークショップ、文学部OB教員によるシンポジウムを開催した。イベントはオンライン中継したほか、終了後に動画としてまとめ、Webサイトに掲載した。

(1) 記念式典

藤村耕治実行委員長の進行のもとで、廣瀬克哉本学総長、清原孟文学部同窓会会長からのビデオメッセージ等による祝辞を賜り、安東祐希文学部長(当時)より挨拶があった。

(2) 能楽研究所による講演・ワークショップ

イベントの第1部として、宮本圭造能楽研究所教授の司会のもとで、能楽シテ方金春流の井上貴覚氏(日本文学科卒業生)と伊海孝充日本文学科教授による対談形式の講演が行われ、本学ならびに文学部と能楽研究所の関係、能楽との出会いや学生時代の日本文学科での学び、能楽の諸流派、能楽師としての生き方など

をお話しいただいた。

次に、小鼓方大倉流の大山容子氏、シテ方金春流の井上貴覚氏による謡「玉之段」の実演をいただき、山中玲子教授（能楽研究所長）から大山氏にインタビュー形式で謡の世界についてお話しをいただいた。

さらに、シテ方金春流の辻井八郎氏ならびに本田芳樹氏に、「羽衣」の装束の着付けを実演していただき、着付けを済ませた井上氏を中心に、「羽衣」の舞を演じていただいた。

(3) シンポジウム

第2部として、奥田和夫哲学科教授の進行によって、各学科を定年退職した教員6名によるシンポジウム「文学部の過去・現在・未来―百年間のたからもの―」を開催した。牧野英二氏（哲学科）、堀江拓充氏（日本文学科）、結城英雄氏（英文学科）、山名弘史氏（史学科）、佐藤典人氏（地理学科）、吉村浩一氏（心理学科）の順に、文学部および各学科のあゆみと遺産、受け継ぐべきことと改めるべきこと、今後100年の展望についてお話しいただき、今後の大学教育のあり方についてもご提言いただいた。

それぞれのイベントの内容は100年の節目としてふさわしいものとなり、文学部の歴史と奥行きをあらためて示すことになった。



〔図1〕「羽衣」の舞

4 動画制作とキャンパス紹介

記念イベントに先行する形で、各学科ではWebページ企画のために新たに動画制作を行った。「文学部の過去・現在・未来」という共通テーマに沿って、各学科の歴史や所蔵資料などを扱う「展示編」、現在の学生や授業の様子を示す「在学生編」、そして学生の未来の姿を示す「卒業生編」という3種類の動画をまとめ、10月までにWebサイト上で6学科合計18本を公開した。各学科の個性が押し出された動画は学科のあゆみの一端や現在の姿を示すとともに、現在の人文系の諸科学を学ぶ学生の姿や、各地で活躍する卒業生からのメッセージなどを伝えており、歴史ある学部にあふらしい内容となった。

また、対面開催に備えて準備してきたキャンパスツアーは対面では実施できなくなったため、Webサイト上で市ヶ谷キャンパスを紹介するとともに、広報課の制作したVRムービー等を配置し、インターネット上でのキャンパスツアーとした。

5 募金活動

本学では、周年事業に関する実施ガイドラインにもとづいて、25周年を単位とする学部その他の周年事業計画に



【図2】「文学部 100 周年記念事業」Web サイト

対して理事長が実施を決定した場合に、募金活動を前提として実施経費の一部の補助を受ける制度がある。このため本事業においても「法政大学文学部創立百周年記念募金」を開設し、『文学部同窓会報』に趣意書を同封するなどして募金を募った。また、文学部教授会からも寄付を行い、事業の実施を後押しした。

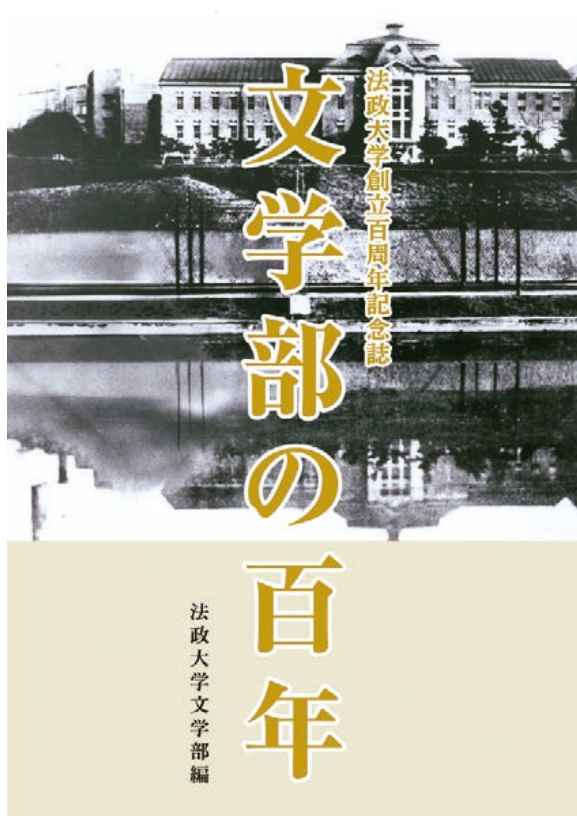
6 記念誌の刊行

記念事業検討の初期段階からその柱として位置づけられたのが、記念誌の刊行である。他の事業がコロナ禍の下で大きな変更を余儀なくされる中、記念誌については着々と準備を進め、『文学部の百年』として2023年3月20日に刊行した。

巻頭には廣瀬克哉総長と前総長で日本文学科を卒業した田中優子名誉教授から寄せられたメッセージを掲載し、記念イベントのシンポジウムの内容を採録した。

記念誌の核となったのは「学部・学科のあゆみ」である。実行委員が中心となって文学部の100年とともに、現在の6学科に心理学科の前身となった教育学科を加えた7

学科の歴史と今後の展望をまとめた。また、資料編として各学科の在籍教員一覧表、文学部年表などを掲載し、本文284ページの冊子となった。



[図3] 記念誌『文学部の百年』

7 成果と課題

本事業の成果と課題について簡単にまとめておきたい。

今回目的とした、文学部の事跡と意義を広く発信するという意図は、実行委員をはじめ学部教員・事務職員を中心とした体制のもとで十分に形にすることができた。文

ve Project

学部と関連の深い能楽研究所の周年記念事業との連携も成功し、各学科の力を結集した記念誌もまとめることができた。

記念事業を進める上で最も大きな障害となったのは、やはり新型コロナウイルス感染症であった。事業の準備を開始した2019年度のうち起こったコロナ禍は事業の終了した2022年度末まで影響を及ぼし、実行委員会もほぼオンラインでの開催となり、全体の意思決定や創造的な意見交換に際して若干の支障をきたした。また、実行計画策定の遅れや変更が生じたことは、事業の周知や募金活動の遅れにもつながった。これが記念事業の財政的な側面にも少なからず影響を及ぼした可能性もある。さらに、100周年イベントが対面開催できずにオンライン中継での対応となったことは、学部・学生・卒業生が一堂に会して参加する機会が得られなかったことを意味しており、学部としての一体感を十分に醸成することができなかったのではないかと危惧しているところである。最後まで対面開催を模索していた実行委員会にとっても無念だったことであろう。

準備段階における卒業生組織との連携という点でも、

コロナ禍は大きな影を落とした。2020年度において各学部同窓会の活動はほとんど停止し、2年以上にわたって学部同窓会間の交流や情報交換も停滞してしまった。学部側もコロナ対応に追われ、文学部同窓会に対しては学部における事業の検討状況を伝え続けてはいたものの、共催申請などに向けての積極的な連携を十分に行えなかったことは反省点である。コロナ禍の影響を被らなければ、当初計画していたキャンパスツアーだけではなく、卒業生の参加する企画がより多く具体化したのではないかと考えられるのである。

こうした厳しい状況が生じた一方で、インターネット環境を活用することによってこれまでにない記念事業になったことも見逃してはならない。企画の準備を始めた当初、学部のWebサイトは周年行事の告知等に使うことを想定していた。しかし、イベントのオンライン開催が決まってからはその環境を最大限に活用することとし、当日の中継や動画の配信のために利用した。イベントの動画も後日視聴できるようにまとめ直してWebサイトで公開し、記念誌もダウンロードできるように配置した。映像を中心として事業全体をWebサイトにまとめてデジタル公開したこ

とは文学部にとって初めての試みでもあった。これらを歴史資料としてアーカイブ化することが次の100年に向けての最初の課題ともなるが、今後の同種の企画に与える影響は決して小さくはないと考えているところである。

おわりに

以上、法政大学文学部における周年事業への取り組みについて概述した。コロナ禍にほぼ重なった事業の企画と運営には実行委員会の苦勞が重なり、大きな計画の変更を余儀なくされたものの、100年の歴史と学部を現在の現状を認識してこれからの展望するという活動を発信し、それらを記録化することには成功したといえよう。

本学は2030年に創立150周年を迎える予定であり、全学的な周年事業を実施することが見込まれる。それは本学の魅力を発信するとともに未来像を提示して、大学・学生・卒業生を広くつなぐ機会となるはずである。その際には文学部における取り組みの成果や反省を活かすことも求められるに違いない。

なお、本稿で紹介した各企画および記念誌『文学部の百

年』の閲覧が可能な「文学部100周年記念事業」WebサイトのURLは左記の通りである。あわせてご参照いただきたい。

<https://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/100/>

二十歳を迎えた博物館 諸事万端に耕雲種月

山下純平

駒澤大学禅文化歴史博物館係長

はじめに

駒澤大学禅文化歴史博物館（通称、禅博^{ぜんぱく}）は、開校120周年記念事業の一環として、平成14（2002）年6月1日に開館した。本学の建学の理念に係る「禅・仏教の文化と歴史」を領域とする博物館として、①学位課程や自校教育、学芸員資格講座の充実に資すること、②文化振興に寄与すること、③広く社会に大学の情報を発信すること、④幸運にも残った歴史的建造物の保存・活用に努めることを目的としている。

令和4（2022）年は、大学開校140周年、禅博開館20周年、さらに淵源である学林創設430周年というアニバーサリーイヤーを迎え、各種周年記念事業を実施

した。ここにその展開や目的をご紹介したい「写真1」。



[写真1]博物館外観

1 駒澤大学の沿革

周年事業をご理解いただくために、まずは本学の歴史の概観にお付き合いいただきたい。

鎌倉時代、道元禅師は中国で学んだ「お釈迦様の坐禅の教え」を日本に伝え、越前に永平寺を建立した。能登に

總持寺を開いた瑩山禪師が、その教えを全国に広め、曹洞宗の礎を築いた。曹洞宗では、お釈迦様と道元禪師、瑩山禪師を「一仏両祖」として尊崇している。

駒澤大学は、文禄元(1592)年、江戸水道橋のたもとにあった曹洞宗寺院、吉祥寺(現都立工芸高校付近)境内に創設された学寮(僧侶の学問所)をルーツとしている。この学寮は禅の実践と仏教の研究、漢学の振興を目的としていたが、後に「旃檀林」と命名され、北原白秋作詞、山田耕筰作曲による本学校歌では、そのリフレインが響く。

明治15(1882)年10月15日には、麻布区北日ヶ窪(現六本木ヒルズ付近)に学寮の流れを汲む「曹洞宗大学林専門本校」を開校し、この日を開校記念日と定めた。

大正2(1913)年に荏原郡駒沢村(現在地)に移転し、同14(1925)年、大学令による大学昇格に合わせて地域の名を冠して「駒澤大学」と改称した。

昭和24(1949)年に新制大学となり、現在に至っている。

2 学生と共に弱冠を慶賀する

いみじくも開館当時に生まれた子が在学生となる折、

共に慶賀したいとの思いから、学生参加型の祝賀行事を開催した。

6月1日、開館20周年記念日当日には、開校時に寄贈された一仏両祖像が安置されている博物館中央ホールにおいて、「開館20周年記念法要(禪博成人式)」を執り行った。寄附行為で「仏教の教義並びに曹洞宗立宗の精神の具現につとめる」とされている総長永井政之を導師に迎え、仏教研修館竹友寮に寄宿する仏教学部の学生にも協力してもらった。総長に法語を読み上げてもらい、列席者と共に般若心経をお唱えして、一仏両祖に冠歳をご報告し、今後の発展を祈念した。

なお、総長の法語は「二十星霜一夢中、開扉禪博著奇功、旃檀林裏先人訓、截断紅塵法界通(二十年の歲月は、夢のように一瞬のうちに過ぎていったが、万人に開かれていく禪博は、常に素晴らしい働きを果たしてきた。旃檀林に襲蔵される先人の教えは、世俗の塵埃を截断し、あらゆる人々に生きるべき道を示している。)」であった。

同月には「開館20周年記念音楽会」も開催。大正ロマンが薫る館内に、吹奏楽部と合唱団が思いを込めた調べを響かせて、華を添えてくれた。

3 盛り沢山の展示催事に、執念を燃やして

(1) 特別展示「曹洞宗両大本山永平寺・總持寺貫首の墨蹟」

当館では禅僧の書である墨蹟の収集を進めている。貫首とは曹洞宗両大本山の住職を意味するが、永平寺第八十世南澤道人猥^{げいか}下、總持寺独住二十六世石附周行猥下から、開校140周年を記念して自ら筆を取られた墨蹟を寄贈いただき展示した。兩名ともに当館が図書館だった時代に勉学に励まれた卒業生であり、在学中の写真も交えて展示したが、後輩たちには大きな励みになった「写真2」。



[写真2] 曹洞宗両大本山永平寺・總持寺貫首の墨蹟

(2) 開校140周年特別公開「駒澤大学貴重図書」

― 駒澤大学図書館のあゆみ ―

① 「駒澤大学図書館のあゆみ」

当館は、昭和3(1928)年に2代目の図書館として建てられた耕雲館(東京都選定歴史的建造物)を活用している。これは、駒沢移転時に麻布から移築した初代図書館が関東大震災で損壊したために建設された震災復興建築である。令和4(2022)年には4代目となる新図書館が開館したが、こうした経緯にちなんで本学図書館の歴史について展示した。なお、耕雲館の名は禅語「耕雲種月(苦労を厭わず、着実に努力する様)」から採られている。

② 「駒澤大学貴重図書展」

本学図書館が所蔵する貴重図書を、三期入れ替えて展示した。百万塔陀羅尼^{だらに}や「家忠日記(重文)」、「シエイクスピア戯曲全集」第2版など「禅・仏教」や「歴史」、「文学」といった領域の他、「リヴァイアサン」や「官板実測日本地図」といった「社会科学・自然科学」も展示対象として、本学の多彩な教育研究領域を示すように構成した。

(3) 禅博セミナー「大学図書館の歴史と建築」

図書館関係展示に関連し、2講演を開催した。

① 建築編「駒澤大学耕雲館(旧図書館)に見る百年前のインフルエンサー」

フランク・ロイド・ライト風とされる当館建物を設計した菅原榮蔵が、どのような影響を受けて建築に臨んだのかという視点で中山章氏(当時、東洋大学非常勤講師)にご講演いただいた。菅原は、令和4(2022)年に国の登録有形文化財に登録された銀座ライオンビルや旧新橋演舞場も手掛けている。

② 歴史編「図書館・書物・読書―その源流をたどる―」

旧図書館は「仏典・禅籍では東洋」とうたわわれているが、經典を収蔵する寺院の経蔵が図書館の源流であるという視点から小黒浩司氏(作新学院大学教授)にご講演いただいた。

(4) 大学史特集展「駒大140年のあゆみ

―初公開! 設置認可書―」

釈迦に説法ではあるが、大学や学部学科などの存立根拠は設置認可書である。

本学は明治15(1882)年の開校以来、私立学校令

や専門学校令、大学令により認可されてきたが、昭和24(1949)年4月1日からは新制大学として認可され、仏教学部、文学部、商経学部(現在の経済学部)の3学部でスタートした。その後、増設した4学部も含めて設置認可書を初公開して、140年のあゆみと学部学科の軌跡に思いをさせてもらった。

(5) 開校140周年記念ミステリーバスツアー

学生を対象として、本学のルーツをたどるバスツアーを催行した。行き先は事前に知らせず当日都度明かして、ワクワクドキドキ楽しんでもらう趣向とした。

本学のルーツである曹洞宗江戸三学寮があった泉岳寺(港区高輪)、青松寺(獅子窟、港区愛宕)、吉祥寺(施檀林、文京区駒込)、開校の地である曹洞宗大学林跡(現六本木ヒルズ付近)、吉祥寺跡(和田倉門と水道橋付近)を巡った「写真3」。昼食には、明治時代に大本山總持寺が能登から移転した横浜で、当館建物が竣工した昭和3(1928)年に発売が開始されたことにちなんでシウマイ弁当を用意して喜ばれた。昼食後には、東京23区内最高峰の愛宕山を登り出世を祈願した。

(6)開館20周年記念デザインアート・ロゴ制作

絵描きユニット「だるま商店」による記念デザインアートを制作した。

本学や当館にまつわる歴史などの要素を、絵師の安西智氏(本学国文学科卒業生)が極彩色でふんだんに描き、祝意にあふれる作品に仕上げてくれた。作品は、



[写真3] 吉祥寺「施檀林」扁額の前にて記念撮影



当館初のデジタル資料として収録した。本学や当館にまつわる西暦年と当館のシンボルである天井ステンドグラスの八角形を組み合わせたロゴ(zenpaku J&C作)と共に、クリアファイルを作製するなど周年事業に活用した[図]。



[図] 開館20周年記念デザインアートとロゴ

4 800年の時を超えて迫る！ 『正法眼蔵嗣書』修訂本の源流

『正法眼蔵』は「仏法の真髄をあまなく包蔵せる書」という意味があり、道元禅師の代表的な著作として知られている。95巻本では16巻にあたる「嗣書」には、面授嗣法（師と弟子との仏法の人格的相承）と嗣書授受の重要性を説く内容が記されている。

当館は平成19（2007）年に、同巻の清書本にあたる修訂本を収蔵した。これには下書きにあたる草案本が存在し、江戸時代に26葉に切断・分施された記録があり、このうち現在全国11箇寺に13葉のみ所在が確認されている。草案本と修訂本を比較することで、現在の最終的な形に至るまでの経緯がわかるため、道元禅師の思想をうかがい知る上で草案本の文化的価値は非常に高い。

そこで、草案本のレプリカを作製して、当館所蔵の修訂本と一堂に展示することを目指し、令和4（2022）年から二カ年度にわたって計画、実施している。広く一般に禅や仏教への興味・関心を持ってもらうことはもちろん、大学という研究機関が設置する博物館として、レプリカ

や高精細画像を広く教育研究の用に供して、『正法眼蔵嗣書』研究の深化・発展に寄与したいとの思いがあった。事業実施にあたっては、クラウドファンディング（CF）にも初挑戦した。資金調達という目的はあったが、CFというチャネルを通して、本学や当館、禅・仏教を広報、PRすることも目指した。

おかげさまで、本学に所縁のある方はもちろん、所縁のない方からも広くご賛同を得て、目標金額を上回るご支援をいただいた。無事に第1期分6箇寺7点のレプリカが完成し、「『正法眼蔵嗣書』の成立く草案本と修訂本」と題して展示した。今年度は引き続き、第2期分5箇寺6点の作製に取り組み、完結を目指している「写真4」。

当該事業に関連して、禅博セミナー「『正法眼蔵



【写真4】『正法眼蔵嗣書』草案本レプリカ

嗣書』について」を開催し、曹洞宗僧籍を有する角田泰隆氏(本学仏教学部教授)に講演いただいた。

(<https://readyfor.jp/projects/zenpaku2022>)

5 コロナ下に冠をいただき、いざZX

大学の周年事業で誕生した博物館が、思いも掛けずコロナ下で弱冠を迎え、周年事業を行った。若干は報恩感謝と親孝行ができたのではないかと思う。

コロナ禍では一時休館も余儀なくされ、再開後も客足が戻らない状況が続いた。

折しも約70年ぶりの博物館法改正で、「資料のデジタル・アーカイブ化」が博物館事業に追加されることも受けて、資料のデジタル公開を推進。YouTubeチャンネルの開設やGoogle Arts & Cultureへの登録、SNSでの情報発信を通して「デジタルでも楽しめる博物館」を目指している。周年事業の多くもライブ・アーカイブ配信をするなど、ハイブリッドで楽しんでもらえるようにした。

開館20周年の年に初開催したナイトミュージアム「ぜんぱくになにかようかい?」は、東京都「こどもスマイル大

賞」遊び・学び部門を受賞して小池百合子都知事に表彰されたが、ICOM(国際博物館会議)が定義する博物館の機能である「愉しみ」を提供するという点も意識して活動している「写真5」。



[写真5]ナイトミュージアムで妖怪に扮する博物館スタッフ

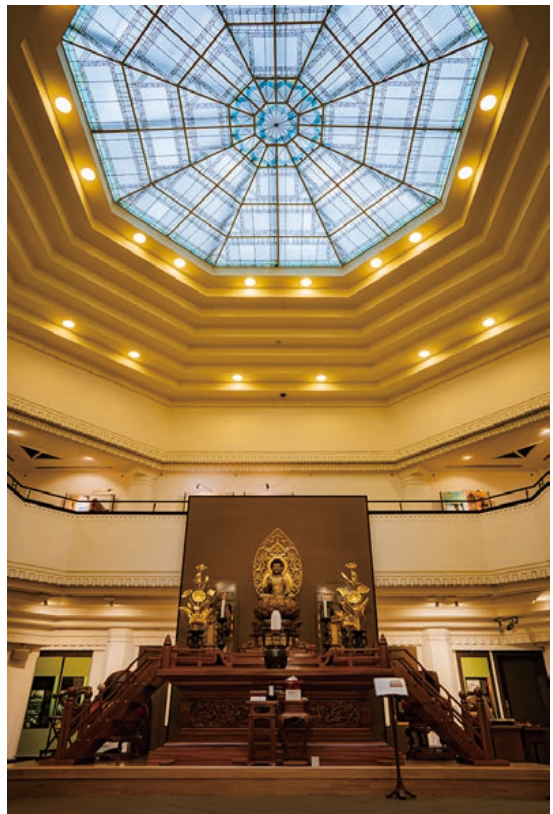
博物館は図書館とは異なり、大学設置基準上、設置しなければならない施設ではなく、また学位取得に際して必ずしも学生が利用することはない。

しかしながら、知的好奇心の喚起や自校教育に果たす役割は小さくない。

学校教育法に基づく大学のなかにあつて、社会教育法に基づく社会教育施設でもある大学博物館は、広く社会的資源や研究成果を還元するなど社会連携の一翼を担うことができ、大学の広報・PRチャネルのひとつとしても有効に機能する施設である。学習指導要領の改訂により、初等中等教育での活用も一層求められている。

周年という節目を捉えることはもちろんのこと、リアルでもオンラインでも、日常的に禅博に触れてもらうことで、生活に潤いと豊かさ、愉しさを感じてもらえるようにすること、即ちZX(ゼンパク・トランスフォーメーション)を推進し、もって「仏教の教えと禅の精神」を建学の理念とする駒澤大学をPRしてゆきたい。

ときに、今年が駒沢移転110周年である。



[写真6]博物館内観

博物館ウェブサイト

<https://www.komazawa-u.ac.jp/facilities/museum/>

YouTube

<https://www.youtube.com/@zenpaku2002>

Google Arts & Culture

[https://artsandculture.google.com/partner/the-museum-of-](https://artsandculture.google.com/partner/the-museum-of-zen-culture-and-history-komazawa-university)

[zen-culture-and-history-komazawa-university](https://artsandculture.google.com/partner/the-museum-of-zen-culture-and-history-komazawa-university)

中興の祖、 山岡順太郎のこと

芝井敬司

関西大学理事長

はじめに

山岡順太郎は金沢の人。1866年に生まれ、金沢医学校に入学したが、「志は医に非ず」として退学し、陸軍士官を志して上京。転じて茨城県の官吏となるが、1892年には同郷の先達である中橋徳五郎を頼って逋信省に入省した。

同省主計課法規係長にまで進んだが、1898年、中橋とともに官を辞して大阪商船(現・商船三井)に入社。以来十数年中橋社長を助け大阪商船の発展の基礎を築く。また、大阪鉄工所(現・日立造船)の社長となり、積極経営が功を奏して、見事再建に成功。一躍、大阪財界に名を馳せた。

1919年には、黒部川の電源開発を目指す日本電力

(現・関西電力)を創設して社長となる。宇治川電気、大阪曹達、大阪住宅経営など十有余の会社役員を兼ねた。1917年から1921年まで、本学創立者の一人である土居通夫のあとを継いで、第8代大阪商業会議所会頭を務めた。

「写真1」にあるように、一見して容貌魁偉。「非常に茫洋としておられて、しかも非常に細心」、「非常に独創的な人」「物事の判断、決断の点では実に天才的な頭を持つ人」「大きな数字をつかみ得る人、鋭い人、そして大きな仕事を計画してやり抜く人」などの言葉が、山岡をよく知る人の口を通じて伝えられている。



[写真1]山岡順太郎

1 山岡順太郎と関西大学

その山岡が、大阪商業会議所会頭を辞して、関西大学の大学昇格を主導することになった。単なる偶然かあるいは運命なのか、原敬内閣の下、1919年に施行された大学令に基づき、文部大臣として高等教育の拡張政策を精力的にリードしたのは、政界に転身した中橋徳五郎であった。おそらくは中橋との深く密接な関係をも見こまれて、50代半ばの著名な経済人が、関西大学の大学昇格と新しい大学づくりを請け負うという想定外の出来事が起こったのである。

すでに1905年、専門学校令による私立関西大学を称していた本学であったが、この度の大学令による大学昇格のためには、広大な校地、充実した校舎と施設設備、優れた多くの教員スタッフ、財団法人として永続性を担保できるだけの確かな基本財産が必要であった。

大学令の施行を受けて、他の有力私学とともに早期昇格を目指した本学も、積極的に寄付事業を推進していたが、思うように必要額を満たすことができずにいた。前述のように、広大な校地、充実した校舎と施設設備、優れた

多くの教員スタッフを手当てするために必要な出費を工面するだけではなく、文部省へ納めるべき法学部と商学部の2学部設置に必要な60万円の供託金が、なかなか調達できなかったからである。

山岡と関西大学との関わりはこの頃からで、本学理事柿崎欽吾(当時、大阪商船顧問弁護士)の斡旋により、1920年に山岡は本学評議員に推挙され、1922年には総理事に選任された。山岡は総理事としてリーダーシップを発揮しながら、1922(大正11)年6月5日の大学昇格の日を迎えた。さらに翌年には学長に選任される。後に終戦後の大学再建期に学長を務め、名学長として誉の高い岩崎卯一は、当時をこう回想している。

「当時としては大阪の実業界の巨頭が、名もなき私立大学に手をつけるなんていうことは想像もできなかったことなんでありますが、55、56歳でおありになったと思う山岡先生が、自分の当時の子分4人を引き連れて関西大学の理事陣を構成されたのであります。…(中略) : 子分の方はもう俊敏そのもので、ちょうどセパードを思わせる人ばかりですね、議論でも筋道が立っておるし、われわれから今考えると、あまりにも秀才というような人

ve Project

ばかり揃っておった。その自分と性格の全く違う俊敏そのものような人をですね、この茫洋とした山岡順太郎先生が率いていかれる。その風格というものは、今でもその印象に残っております。」

2 大大阪の時代

関西大学が大学昇格を果たしたところ、当時の大阪は、いわゆる「大大阪の時代」の入り口に差し掛かっていた。日露戦争と第1次世界大戦による軍需景気をへて工業生産額が飛躍的に増加し、経済活況期を迎えた大阪は、「煙の都」「東洋のマンチェスター」と称されるようになった。1925年の第2次市域拡張の結果、大阪市は東京市を上回る日本一の大都市になった。当時の人口211万人は、ニューヨーク、ロンドン、パリ、シカゴ、ベルリンに次いで、世界で6番目に人口の多い都市にランクされる。

大阪市長の池上四郎、その下で助役を務め、池上を継いで市長となった関一、この2人の市長が推進したさまざまな事業もまた、大阪の経済発展を背景に実施された。市の事業の範囲には、パリのシャンゼリゼに倣った御堂筋

の大拡幅工事、日本初の市営地下鉄の建設、市電や市バスと港湾整備、やはり市立としては日本初の大阪商科大学の設立、中央公会堂や動物園から、児童相談所や公共託児所の設置までを含んでいた。そしてさらに、急激な産業発展と人口増加が生み出す生活環境と衛生環境の悪化、人口増加と都市化に伴う社会問題の解決まで、当面するさまざまな課題の解決に向けて、池上と関の2人の市長の力量が試される時代でもあったと言える。

住宅問題もまた、彼らが直面した課題の一つに相違ない。そもそも助役時代の関一は、1918年、後藤新平を中心に都市政策に係わる官僚・有識者らによって構成されていた都市研究会のオピニオン・リーダー的存在であった。都市研究会は1919年に『都市公論』誌上に、「都市住宅政策要綱」を発表していたが、その第5項「住宅の建築及建築事業の保護」では、「中産階級以下の住宅経営を目的とする建築会社の設立」「建築組合の設置」「公共団体の住宅供給」「官公署会社銀行等の其の使用人に対する住宅供給」が提唱されていた。

関一は、翻意を求める渋沢栄一の説得を振り切って、1914年に東京高等商業学校(現・一橋大学)の教授

職を辞して大阪市助役を引き受け、行政の現場に活躍の舞台を求めた社会政策と都市計画の専門家である。そして、奇しくも都市研究会が発足したこの時期に、関一の住宅問題の解決に向けた政策具体化の過程と、関西大学の大学昇格事業に山岡順太郎が深く関与していくプロセスとが、軌を一にしながら進行していったのである。

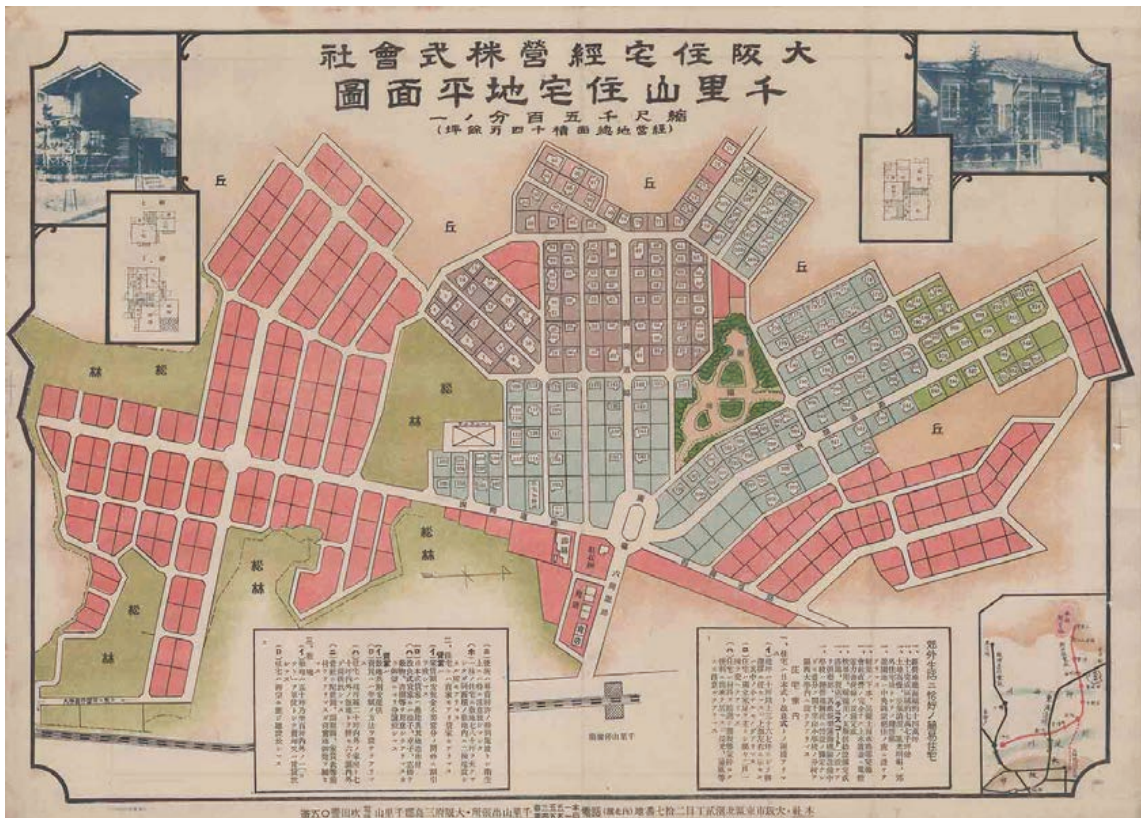
3 山岡順太郎の大構想

大阪商業会議所の会頭時代、山岡は、大阪経済の発展のためには大阪市内の会社や事業所に勤める中間層のサラリーマンに良好な住環境を提供する必要があると考え、1920年に資本金1000万円の大阪住宅経営株式会社を創立して社長となった。この大阪住宅経営という会社は、時の大阪府知事林市蔵や大阪市長池上四郎が主唱発起人となり、商業会議所の議員をはじめとする大阪経済界の有力者の支援で創設された会社で、配当金に上限を設けるなど公共性の強い会社であったとされる。

一方、大阪府吹田の千里丘陵の開発を目的として、1918年に創立された北大阪電気鉄道(現・阪急千里

線)は、大阪住宅経営の筆頭株主となって、同社との事業連携を進めていく。その結果、大阪住宅経営は北大阪電気鉄道が所有する千里山の土地を譲り受けた。1920年、両者は、内務省の外郭団体で、後藤新平が会長を務める都市研究会に、千里山の土地を対象に、約100万坪の「田園都市」の設計を依頼している。依頼を受けた都市研究会は、エベネザー・ハワードがロンドン郊外に創設したレッチワースをモデルに、約100万坪の「田園都市」の設計図を提出した。このような経緯をへて誕生した千里山住宅地は、渋沢栄一、小林一三、五島慶太らが行った東京での田園都市開発とほぼ同時期ながら、日本最初の田園都市であり、今も当地の風景にその面影を残している。「写真2」。

このように見ると、関西大学の大学昇格に深く関わった山岡順太郎の目的は、単に関西大学の大学昇格や有為な人材の育成にとどまるものではなかったと思われる。たしかに、すでに大阪高等商業学校(大阪市立大学から現・大阪公立大学)と大阪高等工業学校(大阪帝国大学工学部をへて現・大阪大学工学部)において商議員を務めていた山岡は、高等教育の意義や役割、その重要性に一定の



[写真2] 千里山住宅地平面図 1924 年ごろ

経験と見識を持っていたと思われる。

しかし、大学昇格という悲願の達成を一途に期待している関大側とは別に、「郊外理想郷」としての田園都市建設をめざす大阪住宅経営としては、高等教育を中心とするしつかりとした教育機関の存在が、住宅地の魅力を高めてほしいという期待があったであろう。そして北大阪電氣鉄道もまた、通勤客に加えて定期的に乗車する大学生を通学客として確保することは経営戦略上のポイントであったと想像する。そうした関係者の望みの結節点に、大きな構想を描く山岡の存在があって、彼が先頭に立って大構想を精力的に推進し、適切にコントロールしていたと考えられる。

住宅、鉄道、大学、そしてすでに開園していた遊園地である「千里山花壇」も合わせて、この時期の山岡順太郎は、独創的な着想と類まれなる実行力をもって、千里山の総合的な地域開発をトータルにデザインしていたのである。そして、大学に昇格する予定の関西大学は、彼の壮大なプランの実現に欠かすことのできない大切なピースだったと言えるよう。

4 学の実化の提唱と山岡の理想

「セパードを思わせる」4人の部下を引き連れて、関西大学に乗り込んできた山岡は、新しい大学を創り上げるために、矢継ぎ早に手を打つ。キャンパス整備の点では、大学予科校舎の建設をはじめとして、1922年から数年間のうちに、大学本館、図書館などが次つぎと建設されていった。1926年には、「東洋第一」と称された大運動場が完成し、体育・文化学生生活動が活発化して「関大スポーツの黄金時代」が現出した。

大学昇格の年に山岡が成したことは、キャンパス整備にとどまらない。「自然の秀麗、人の親和」で始まる関西大学学歌はこの年に制定され、100年を超えて今も変わらず歌い継がれている。新しい大学を象徴する理念である学是「^{がく}学^{じつげ}の実化」（「学理と実際との調和」も、山岡による提唱から始まった。やがて学の実化は、同時期に山岡が繰り返した述べた言葉にしたがって、「学理と実際との調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」の4本柱にまとめあげられ、今も私たち関西大学の教育理念となっている。

本学中興の祖、山岡順太郎は、1928年11月26日に62歳で没した。死の直前まで、関西大学山岡総理事は大学の発展に引き続き精力的に取り組む教育者であったが、一方で、日本電力山岡社長は、雄大な構想の下、「電源ありて産業あり」のスローガンを掲げて、黒部を中心とするアルプス水系の電源開発に、全力を傾注する偉大な実業家であり続けた。

大学昇格100年は、単に経過した年の数を数える作業ではない。記念事業が教えてくれたのは、高い理想を掲げて新しい大学のあり方を追求した山岡順太郎という偉大な先人の姿であった。私たち関西大学が今見る形姿を誇ることができるのは、山岡順太郎の独創的な構想力、エネルギー豊富な実行力、高い見識と細やかな心配りに支えられた豊かな人脈のおかげに他ならない。そして、今を生きる私たちは、山岡の理想の何をどのように受け継いでいくのかと、強く問われている。

地域との協働による

周年の取り組み

—池袋キャンパス100周年記念事業—

佐々木 静

立教大学総長室企画課長補佐、
兼立教学院企画室長補佐

はじめに

本学の起源は、1874年(明治7年)、アメリカ聖公会の宣教師チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が、東京築地の外国人居留地に聖書と英学を教えるために開いた私塾である。わずか数人の生徒で始まった学校は、徐々に規模を拡大し、築地キャンパスの狭隘化等が問題となったことを機に、東京築地から現在の池袋キャンパスに1918年に移転した「写真1」。そして、1922年には大学令による大学として認可され、大学として少しずつその規模を拡大してきた。現在では、2023年度に開設し

たスポーツウエルネス学部・研究科を含め、池袋と新座の両キャンパスに、11学部・15研究科を有し、約2万人の学生が学んでいる。移転から100年余り、池袋キャンパスの変わらないレンガ造りの校舎は、立教大学の歩んできた歴史と伝統を今に伝えている「写真2」。



〔写真1〕移転間もない頃の池袋キャンパス



〔写真2〕現在の池袋キャンパス

池袋キャンパスに移転以降、本学は池袋の街とともに発展してきたが、この間に池袋という理想的な学びの地から受けてきた恩恵は計り知れない。そして、100年にわたり、教学の規模を拡大し、存続し続けられているのは、本学の努力だけではなく、学生、保護者、校友、企業、地域

の方々をはじめとしたステークホルダーの皆さまの支えがあったからに他ならない。

そこで、池袋キャンパスへ移転してから100年となる2018年を記念して、100年間の感謝を伝え、池袋の街と共にさらなる成長を実現するため、さまざまな記念企画を展開した。

1 記念事業の概要

池袋キャンパス100周年記念事業は、キャンパスを移転し、池袋の地で100年歩んできたことへのお祝いである。これと併せて、長年にわたり池袋キャンパスを支え続けて下さっている豊島区の方々ならびに池袋の街への感謝を伝えるとともに、これからも池袋の街とともに発展することを目的に事業を展開した。

このような目的に合わせて、事業を推進していくにあたり、事業のテーマ(キーワード)として次の4つを設定した。

1. 開校の祝意
2. 立教から池袋への感謝
3. 街(池袋)との話題創出

4. 池袋の未来街づくりへの応援

これらテーマに合ったさまざまな企画を検討し、2018年度の1年間をかけて実施した。記念企画は主に、式典をはじめとした大学実施企画と地域との共同企画の大きく2つの分類で展開した。事業の展開にあたっては、これからも地域と共に発展していくという思いを表現した周年記念シンボルも作成し、広報等で活用した。

2 池袋キャンパス100周年記念事業で行った取り組み

(1) 地域との連携企画の実施

本記念事業は、地域への感謝と池袋の街の話題創出と未来の街づくりへの支援をテーマとしているため、地域と連携し、多くの企画を実施した。企画の検討にあたり、2018年6月に本学と関わりのある池袋の企業や商店街の方々に本学に集まってもらい、スタートアップの打ち合わせを実施した。このスタートアップの打ち合わせには、想定していたよりも多くの50〜60名の方々が集まった。そこでは、池袋の100年の歴史を振り返るとともに、本学の

ve Project

池袋キャンパス100周年と豊島区の未来計画の内容について共有した。そのうえで、共同でさまざまな記念企画案を大学と地元の方々の双方から出し合い、その企画を推進する担当者についても双方から選出した。この打ち合わせは今でも非常に印象に残っており、地元の方々のアイデアの豊富さや、熱量の大きさに驚きを感じたことを記憶している。

このような検討を経て実施した企画の1つが共同フラッグの制作であった。立教と池袋の街を盛り上げることを目的に制作し、大学が立地している池袋西口に設置した「写真3」。池袋の街と立教が共にあることを示す記念ロゴをあしらったフラッグの掲出により一体感を創出できたことは一定の成果があった。

また、50年後の未来に向けたメッセージを立教と地域で共に残していこうという試みとして、立教小学校児童をはじめ本学関係者、校友、豊島区の方々等、800名もの方々からメッセージを協働で集めた。そして、これらのメッセージをタイムカプセルに入れて、記念式典後に開催した祝賀会(後述)にて封印式を行った。立教だけでなく、池袋の街の方々のメッセージをタイムカプセルに保存できたこ

とは、メッセージの多様性を担保できたという意味で共同企画の意味があったと考えている。なお、タイムカプセルは、50年後に開封する予定で立教学院展示館にて保管している。

その他、池袋の街歩きと講演会をセットにした共催企画や、池袋の街を拠点に活動している企業との映像制作等、全7企画を実施した。

昨今、大学の役割として地域との連携の重要性が一層高まっているが、このような形で地域との連携企画を数多く実施し成果をあげたことは、これからも地域と共生していくうえで一定の役割を果たしたと考えている。



[写真3] 池袋の街に設置されたフラッグ

(2) 記念式典・祝賀会の催行

池袋キャンパス100周年の記念式典は、多くの方に直接感謝を申し上げたいという趣旨で、校友に向けた式典

と、学内関係者および地域の方々に向けた式典に分けて二度実施した。

校友向けには、毎年10月に開催しているホームカミングデーにて、オープニングセレモニーを執り行った後、「池袋駅の歴史と立教大学」というテーマで記念講演を行った。

学内関係者および地域の方々に向けては、11月に実施した。記念式として礼拝を行った後、著名校友4名のトークセッションを実施した。この内容は、来場できない多くの方々に視聴していただくため、別会場やSNSでも同時配信を行った。また、このトークセッションはテレビでも取り上げられ、話題として広く発信することができた。講演会の後には新たな試みとして、学内で、学生団体によるよさこいの演舞を先頭にお祝いのパレードも実施した。

また、この記念式典と併せて実施した祝賀会では、「立教箱根駅伝2024」事業の開始と2024年に迎える立教学院創立150周年記念のスタートアップを宣言している。祝賀会のお土産には、池袋の街への支援の意味も込め、地元商店街のお菓子を採用した。

祝賀会当日、地域連携として実施したタイムカプセルは、この祝賀会で封印式が行われる予定となっていた。協

働でメッセージを集めていた地域の担当の方々は、この日は招待者としてお招きしていた。祝賀会当日に、大学側の共同企画の担当者が招待者から追加のメッセージを集める手筈となっていたが、祝賀会の運営で手が回らない状況であった。来場者が少しずつ増えてきた頃、地域の方々や大学のスタッフに代わり、率先して、来場者に対して、タイムカプセルへのメッセージ記入を呼びかけ、記入するブースに案内して下さった。地域の方々との連携企画実施のために本学に集まってから数か月間、共に共同企画を実施する中で、その関係性は確かに構築されているのだと感じた。当日の運営に協力して下さいました地域の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

(3) その他の企画

1年間で実施した記念企画は合計で18企画に上った。大学で実施した池袋キャンパス100周年記念企画をいくつか紹介する。

立教学院展示館では、100年の変遷や出来事を貴重資料や写真、展示物にて歴史を振り返る「歴史の舞台、池袋キャンパス―『池袋の立教』その100年―」を開催し、

100年の歴史を振り返った。

池袋キャンパスで象徴的な建物であり、保存エリアに位置付けている本館周辺をプロのレゴビルダーがレゴブロック(サイズは、縦1m×横1.8m×高さ0.5m)で制作した。このレゴブロックは、現在も、多くの学生が行き来する池袋キャンパス図書館入口付近に展示している「写真4」。また、併せてナノブロックでも本館付近の制作を行っており、製品化した。

また、郵便局との連携企画として、本学オリジナルの記念エコ年賀はがきの制作も行い、豊島区内の郵便局で限定販売した。



[写真4]池袋キャンパス内に展示されているレゴブロック

31年間にわたり本事業を実施した成果

池袋キャンパス100周年記念事業の目的は、地域の皆さまと池袋の街への感謝と、池袋と立教が共に発展

していくことにあり、本事業が地域との一層の協力関係の構築に寄与したという点で、一定の成果があったと考えている。また当時、7年後の2024年度に立教学院創立150周年を迎えるタイミングであったため、本事業は、創立150周年記念に向けたスタートアップに位置付けていた。当日までに準備を進め、記念祝賀会にて、創立150周年記念事業として、2024年に箱根駅伝第100回大会への出場を目指す「立教箱根駅伝2024」事業の立ち上げを発表できたことも大きな成果であった。

42024年に迎える創立150周年

2024年の創立150周年に向けて、2018年にスタートアップとして幾つかの記念事業を開始し、2019年にはロゴマーク・キャッチコピーも制作した。近年、学校法人の創立記念事業は、数年かけて実施することが主流となりつつある。また150周年という大きな節目の年をお祝いするにあたり、池袋キャンパス100周年記念の祝賀会での宣言以降、さまざまな計画を実施する予定でい

た。しかし、体制を構築し、創立150周年に向けた取り組みについて検討を行っている最中に、COVID-19感染拡大の影響を受けた。先行きが不透明な状況で、教育環境の整備を最優先する中、創立150周年を学院が一丸となって推進する機運の醸成が課題であった。

一方で、2018年に開始した創立150周年記念事業には成果が出ている事業がある。約半世紀ぶりの通史として編纂している『立教学院百五十年史』はその執筆を進め、全3巻のうち、2023年2月に第1巻を刊行した。また、「立教箱根駅伝2024」事業は、COVID-19の影響を大きく受けることなくその活動を継続してきた。その5年にわたる体育会陸上競技部男子駅伝チームの努力と大学の支援が実を結び、目標より1年早い2023年1月の箱根駅伝本選への出場を果たしている。55年ぶりの箱根駅伝本選出場は、本学関係者や校友をはじめとしたステークホルダーの一体感醸成に繋がり、事業として大きな成果をあげた。なお、この事業の目標達成に向けても、校友をはじめ、地域の方々の応援・支援を継続的にいただいていることを付言しておく。

2022年度以降、さまざまなことが通常に戻る中、

キャンパスで実施する行事等も増えてきたことを踏まえ、創立150周年に向けた取り組みについて、再び検討を開始している。池袋キャンパス100周年で再確認したステークホルダーとの連携を、2024年の創立150周年に向けてもさらに促進していきたいと考えており、地域の方々をはじめ、本学に関わる全てのステークホルダーに向けた記念企画を計画していく予定である。これからも、立教に関わるすべてのステークホルダーとともに、発展を遂げたい。

「ガクモンノススメ」プロジェクト

山崎 敬夫

慶應義塾広報室長

1 プロジェクトのはじまりと4本の動画

2022年、慶應義塾は1872(明治5)年に福澤諭吉が小幡篤次郎とともに、『学問のすゝめ』初編を刊行してから150年の節目の年を迎えた。同書は1876(明治9)年ごろまでの間に全17編が刊行されている。新型コロナウイルス感染症の拡大の後、ロシアによるウクライナへの侵攻など、誰が予想できたであろうか。この目まぐるしく激動する現代においても『学問のすゝめ』は示唆に富み、当てはまることが多いことから、これを機に慶應義塾の原点に戻り、学生・生徒をはじめ、受験生にも読んでほしいとの願いのもと「ガクモンノススメ」プロジェクトを始動した。

『学問のすゝめ』は福澤の著書の中でも代表的な著作で

あり、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」で始まるフレーズは言わずと知れた書き出しである。いわば日本の独立宣言と言っても過言ではない。すぐに答えの見つからない現代にあり、将来を担うZ世代の若者をターゲットに据え、できる限り親しんでもらえるよう、社会的に影響力のある方々に出演してもらい、伊藤公平慶應義塾長との動画を制作した。さらに、より親しみを持って接してもらえよう、「ユキチくん」なるデフォルメされたキャラクターを使うなど内容を工夫したが、キャラクターの制作には少々気を遣った。と言うのも、「福澤先生をデフォルメするとは何事か!」と、卒業生からお叱りを受けるのではないかと懸念されたものの、果たしてその心配は杞憂に終わり、今ではむしろ応援していただいている。本稿では、プロジェクトの概要を報告し検証したい。

動画の制作は、公開の半年ほど前から制作会社と協議を開始した。はじめに『学問のすゝめ』を人生の道標として「自分ゴト化」できるコンテンツにすること、また視聴者に親しんでもらうためのきっかけづくりをすることを全体的なイメージにした。動画制作はコストがかかるため、効果測定を行い費用対効果の検証を念頭に置いた。これま

でに4本の動画が完成し、特設サイトも開設した。特設サイトはキーとなるビジュアルにステートメントを合わせてデザインし、また黄色を使い目に留まるよう工夫を凝らした。コンテンツの広報に重要な柱となるビジュアルとステートメントが完成したことで、先行きの見通しが不安から確信に変わった。

1回目の動画では、幸運なことにタレントで卒業生の櫻井翔さんに出演を快諾いただいた。2022年11月18日に公開した動画では、伊藤塾長の「三田キャンパスへお帰りなさい」という言葉が始まり、母校を久々に訪問した櫻井さんが慶應義塾で過ごした日々を回顧するとともに、卒業後の人生やこれまでのキャリアにおけるさまざまな経験を通じて、学び続けることの大切さを対談形式で伝えている。

2回目の動画は、「スポーツと『学問のすゝめ』」である。オリンピックや国際的に活躍するアスリートをお招きし、スポーツに対する姿勢や考え方にも通じる『学問のすゝめ』の教えについて、それぞれの立場から語っていただいた。出演は松岡修造さん(元テニスプレーヤー)、高桑早生さん(パラ陸上競技選手)、原わか花さん(7人制ラグビーユニオン選手)、武藤嘉紀さん(プロサッカー選手)、山縣亮太

さん(陸上競技選手)の5名のアスリートで、伊藤塾長との座談会形式となっている。企画の段階では、アスリートの皆さんが多忙なため、収録の日程調整が難航し、計画どおりに進むかどうかの懸念もあったものの、関係各位の協力により何とか2022年度内に実施・動画公開できたことは奇跡的であった。出演者が自身の経験を踏まえて語り、その内容が最後までやり抜くことの大切さや困難や悩みと向き合う自分との付き合い方などに及ぶと、伊藤塾長がそれに応える形で『学問のすゝめ』の内容に触れ、さらに議論が深まっていく。困難と真摯に向き合ったアスリートならではの琴線に触れる言葉に接することができる。

いずれの動画も、前・後編と分けたが乙世代には少々長めの尺となった。Z世代の若者は、数秒で動画を見るかどうかを判断すると制作会社から聞いていた。トータル40分を超える長さがどう映っただろうか。

2 動画の拡散へのチャレンジと学内における連携

先にも述べたが、制作段階であらかじめZ世代という

ve Project

ターゲット層に可能な限り届くにはどうすべきか、その方法や手段をプロジェクトメンバーで協議し、KPI（評価指標）を設けてどの程度の効果や影響が見られたのか、などの効果測定を行った。動画を告知するための手段は、当初大学公式ウェブサイトののみという考えもあったが、プロジェクトの特殊性に鑑み、新たに特設サイトで展開し、併せてソーシャルメディアでの展開も行うこととした。これに大きく貢献したのが「ユキチくん」の存在だ。特設サイトの真ん中に出ているが、よく見ると瞬きや腕組みして悩む顔、そして動き出す仕掛けになっている。「ガクモンノススメ」の動画を公開する前後の一定期間、「Twitterのアカウントの運用をユキチくん」に委ね、『学問のすゝめ』をはじめとする福澤の言葉を連日紹介し、その中にもユキチくんのさまざまなイラストを紹介した「図参照」。こうしたキャラクターが存在することで、Z世代のターゲット層の関心を引くことにも貢献したと考えている。また、ユキチくんや「ガクモンノススメ」プロジェクトのステッカー（シール）を作り、三田祭（学園祭）でプロジェクトメンバーが来場者に直接配布したり、各キャンパスの学生食堂のトレーにシールを貼ったりして学生への告知に奔走した。一方、生協をはじめキャンパス付近の書店のほ

か、関西方面の書店ともコラボする計画も浮上。慶應義塾大学出版会と連携し、各書店の一角に福澤の関連書籍を配架してもらおうよう交渉し、実現に漕ぎつけた。また、学内の機関誌でも取り上げるとともに、卒業生の集まりである三田会での告知も行った。



〔図〕ユキチくんのイラストを使用した Twitter 画面

本プロジェクトでは、学内での情報共有と連携も重要であった。福澤諭吉記念慶應義塾史展示館は、2022年秋季展に「福澤諭吉と『非暴力』—学問のすゝめ150年」と称した特別展を開催した。また、2022年度福澤研究センター設置講座は、「『学問のすゝめ』150年」と称した講座を全5回にわたり慶應大阪シティキャンパスで開講した。このほか、「福澤先生ウエーランド経済書講述記念講演会」や「三田演説会」と称する伝統の演説会でも『学問のすゝめ』を取り上げている。各学部の教授会など

でもチラシを配布して告知した。

マスメディアを利用した広告企画は、予想外に大規模になった。朝日新聞社が主催する「朝日教育会議」では、「起業のススメー『学問のすゝめ』150年に寄せて」と題して伊藤塾長のほか、山岸広太郎常任理事、平野隆福澤研究センター所長、岡野栄之医学部教授に加え、米良はるか氏（READYFOR株式会社代表取締役CEO）が登壇。福澤の門下生のアントレプレナーシップの紹介とともに、学生への起業への誘いについて熱く語り合った。また、日本経済新聞社との協業による広告企画では、4ページの紙面でSDGsを軸にした伊藤塾長はじめ研究者、学生の取材を行った。とりわけ「慶應義塾SDGs会議ー2022塾生会議」に参加した学生による座談会では、『学問のすゝめ』を交えた活発な意見交換が印象的だ。この他、ジャパン・タイムズでも英文の広告企画を実施した。

3 効果測定と今後の展望

ここまで「ガクモノノススメ」プロジェクトの概要を紹介したが、とりわけ動画の制作によって対象とした学生を行

動変容がどの程度あったのかについて簡単に述べておきたい。行動変容を測る基準はアンケートを用いて実施した。動画を見る前と後でどのように意識の変化があったかを調査するものだ。内容は大きく分けて、①『学問のすゝめ』の内容が現代にも当てはまるものかどうか、②共感できる内容かどうかだ。それぞれの項目でいくつかの判定基準を設けたが、いずれも事前と事後では「そう思う」、「ややそう思う」の回答が2倍以上増加した結果が見られた。プロジェクトとしては『学問のすゝめ』の内容に触れ、動画の視聴者と本の読者がともに①②に対して肯定意見を持つことを期待していたこともあり、自由回答欄のコメントでも同様の意見を見たことは幸いだった。また、三人に一人の割合で本プロジェクトを記憶してくれているとの結果に接した。2回目の動画へのアクセス数は、1回目と比べるとまだ少ないが、今年と来年も実施していく予定だ。裾野を広げれば山高し、の言葉どおり、ターゲット層へのさらなる拡散に努めることでプロジェクトの成否が決まると考えている。今後はアカデミックなイベントや動画なども配信したいと考えている。メンバーたちの熱い思いはこれからも変わらな。課題や反省を踏まえて、我々の学びの旅はまだ続く。